

●矮鶏檜葉ちやばひばといへど育ちて蜘蛛だけが木々のあひだを自由に遊ぶ

布宮慈子

矮鶏檜葉は生長がゆっくりで、初期はとくに遅いという。そんなところからか、(と)いへど育ちて、は。下句で、(蜘蛛だけが木々のあひだを)自由に遊ぶ、には何か空気感がある。「大將軍」は陰陽道の方位神の一つで、三年に一度方角を変えるらしい、平成二十八年の節分の日までは東の方角だったようだ。その方角の土の掘り返しや造作はできないとされ、どうしてもというときに「大將軍遊行日」がある(山形内陸地方の土着信仰)。

伐採を決めたる後に知らざる南に在おはす大將軍様

転結があり、それも何か語りといっている調子があつて、どの歌も風趣に富む。

●暑き日のつづきて瓶の水あつしメダカの稚魚のおほよそ死にたり

丸山弘子

一連タイトルは「夏」。(自宅)庭辺のオンブバッタの歌から詠い出されている、その四首目。このころの夏の暑さをどこから詠うか。小さな事件性。

メダカは売っているのを見ると、種類もあれば値段もそう安くない。ひとつ前の歌は、金魚の歌。こちらも同じく瓶中の、それにしても掌中のような生活圏のものだ。

近寄るを気配に察し浮かび来て瓶の金魚は餌はを欲るなり

作者は本草、小動物に詳しいが、十首目「アナベルとふ白きあぢさる」には驚いている。

●何ごととも変はらぬやうに見えながらあなたから私から去つてゆくもの

結城 文

ゆったりとした詠みぶりで、本草の日本列島、日本(の高温多湿)から、十年ほど前のおとずれ、涸沢ヒユツテ(北アルプス)を思い起こし、失敗を触媒とする生き方と、遠き道のりを反省する心持まで、振れ幅も、大きく摺み直しをしているようなところが面白い。つまり、こういうことだと、大事でなくつぶやいている。

至近では、束の間の花火に心をとられ、楠の暗き木下に葉を仰いで、次の歌のような、いずれにせよ、とりとめもあらぬ思ひ、にとらわれてもいるのだ。

楠の暗き木下に仰ぎをりこの木の葉の数いかほどならむ

●天皇の後追う如く逝きたもう師の齡より二十七年過ぐ

池田桂一

この師は、上田三四二。冒頭の歌、また四首続きで師をしのぶ。売子えごの木の花、花季、沙羅の木の葉ずれ、などの多く花木によって回顧されている師。しみじみとした味。さいごに、余り詠うことのなかったような父の歌が置かれ、その歌とあいだの身辺の歌から一つ。どちらも少し徹ったさびしさがある。

群鳩のくぐもる声の透りくる台風一過の昼の目覚めに

一つ部屋に寝ることもなく過ぎたるを今にし思う父の寂しさ

●梅雨明けを待ちいしごとく木立より蟬の声はす今朝の散歩に

市川茂子

蟬と散歩の取り合わせにより、気持ちのいい一首となった。梅雨明けのパキッとした感じが伝わってくる。たしかに蟬は急に鳴き始めるが、夏をどのように感知するのだろうか。健康ブームの現代を切り取った次の二首。テレビで「〇〇に効果がある」と食品を取り上げると、とたんに店から消えてしまいうらしい。自分もその列に加わることで人の心理を写し、おかしみを誘う。

テレビ見て来たるスーパーの棚の前そこだけ空いて押し麦の場所

押し麦の効用テレビで見し人と棚の前にて言葉を交わす

●人が住む中間色を挟み込みあとはふたいろ夏のみちゆく

小野澤繁雄

「ふたいろ」とはどんな色だろうか。道や住宅街の左右と考えれば、緑と土の色などを思う。水平の方向とすると、一連の題である「空、緑」か。まっすぐに通っている夏の道をゆくのは、いかにも楽しそうだ。視点に特徴があり、いろいろな読みができる歌。次は漢字に注目した歌。所ジョージがずっと「げつきよ」駐車場だと思っていたと、何かで告白したのを思い出した。

月決（め）は北海道、高知県にのみ見えてほかは月極（駐車場）になると

●慣はしの似通ふことに出合ふたび新羅の文化に親しみ深む

河村郁子

短信によると、作者は韓国俳句研究院の十周年記念で慶州を訪れたようだ。郭院長の自宅に招かれた折、オンドルのベッドは韓国独特だろうが、さまざまな作法が日本と似ていることに驚く。新羅の文化の一端をいっそう身近に感じている様子がわかる。

西域ゆ伝はり来たる文明が慶州を経て日本に栄ゆ

●若葉薫る村すつぼりと隠しつつ

谷垣満壽子

大木なのだろうか、若葉が香りを放って村全体を隠しているという。この大仰な対比を面白く読んだ。村を覆うのではなく、隠すと言いつつたところがミソか。次の句は「降りみ降らずみ」という語に注目した。降ったりやんだり（降ったり降らなかったり）を表す連語だが、あまり目にしなくなったことば。詩語としても積極的に使っていきたいものだ。

濃紫陽花降りみ降らずみ昼下り

●虎尾草や空のからだを持って山へ

新野祐子

空っぽのからだを山へ向けて、ひたすら歩ませる。このトラノオはおそらく白い花。花が咲いているのを見ても、うれしい気持ちは起きてこない。この一句に深い悲しみを感じるの、わたしだけだろうか。一連のはじめの句も、透明感のある寂しさが胸に迫る。

人消ゆる谷ほの白くほととぎす